

要介護者の衣服の実態調査

岐阜市立女子短大 山田 令子 ○岩田 素恵

【目的】 日本の高齢化社会が一層進み、介護を要する高齢者の数が急速に増加している。また高齢者以外でも介護を必要とする人がいる。そこで要介護者が心身共に健全で、自立した生活を送り、少しでも快適な衣生活をするにはどんな衣服が望ましいかを探ることを目的として、今回は主に在宅介護の女性軽度障害者に焦点をあて、着衣状態の実態調査を行った。

【方法】 調査時期は、平成7年6～7月である。調査対象は、中部圏の女性軽度障害者412名に聞き取り調査をした。調査内容は、1. 基本調査、2. 着用衣服の実態である。

【結果】 着用衣服の実態については、上衣と下衣の組合せによる着用枚数の出現は、上衣2枚・下衣2枚、上衣2枚・下衣3枚、上衣3枚・下衣3枚の順が多い。平均着用枚数は、上衣が2.2枚、下衣が2.4枚である。服種別で着用範囲が広いのは、上衣ブラウス、ワンピースが1～4枚、下衣はズボン、パジャマが1～4枚である。衣服の購入は、家族、本人の順である。着用衣服の満足度は高く、満足箇所を問うと「色・柄」、「着やすさ」である。不満箇所は「無回答」が多い。28.6%の人が衣服の手直しをしている。ズボンの裾直しが多く、次いで袖直しである。その他着脱しやすいよう工夫していた。今後着用したい衣服については、季節、個人の嗜好、着脱しやすさ、ゆとりなどを考慮した具体的な意見も出ているが、「今あるものでいい」、「特にない」、「無回答」などの衣服に対して消極的な意見の傾向がみられた。